令和２年６月３０日　　台　東　育　英

台東育英

VOl.　20

Ｎｏ．４

台東区立台東育英小学校

校長　瀬下　　清

http://www.taitocity.net/taitouikuei-s/

心の安定～全ての教育の基盤となるもの

副校長　原　　之雄

「新美南吉」という名前をご存知でしょうか。「ごんぎつね」の作者で、50年以上前から4年生の教科書に取り上げられています。今回は「狐(きつね)」という作品を紹介します。あらすじは次のようなものです。

七人の子供たちが、小さい村から半里ばかり離れた本郷へ夜のお祭りを見にいきます。途中で、一番年下で甘えん坊の文六ちゃんが遅れ始めました。大人用のぶかぶかの下駄を履いていたのです。途中で下駄を買うことにしました。

「やれやれ、晩に新しい下駄をおろすと狐(きつね)がつくというだに…。」「そんなの迷信だ。」と言いながらも心配そうな顔の子供たちを見て、下駄屋の小母さんがマッチを擦るおまじないをしてくれます。

子供たちは、夜祭りで綿菓子を食べたり、稚児さんを見たりして楽しみますが、やがて三番叟(さんばんそう)の人形・・・まるで本物の人間のようにペロッと舌を出す人形・・・の不気味さにすっかり元気がなくなってしまいます。子供たちは思い浮かべました、文六ちゃんの新しい下駄のことを。そして、気づきました。自分たちが長く遊びすぎたことを、これから半里の夜道を帰らなければならないことを。

帰りの夜道で誰かが、「コン」と咳をします。考えることはみな同じ。来る時、あれほど文六ちゃんに優しかった子供たちが、1人、また1人と言葉少なに帰っていきます。少し離れた文六ちゃんの家へ送っていく子が誰もいません。いつもは、誰かが必ず送ってくれたのに。一人ぼっちになった文六ちゃんは、もしや自分は本当に狐につかれているのでは、と不安になります。そして、恐ろしくなってきます。自分が狐になった時、家族はどうするのだろうと。お母さんと一緒に布団に入った文六ちゃんは、泣きべそをかきながら、お母さんに尋ねます。

「もし、ぼくが本当に狐になっちゃったらどうするの？」「ね、ね、ね？」

さて、この時、母親は、何と答えたのでしょうか。私たちなら何と答えるでしょうか・・・。作者の新美南吉は、母親にこう言わせました。「一緒に狐になってあげる。」

母親にとって、文六が人間であるかどうかは、問題ではなかったのです。今、目の前にいる文六そのものを大切に思っていたのです。

子供には、一人一人得意なこと、苦手なことがあります。人に優しくできる子もいれば、素直になれず、つい意地悪をしてしまう子もいます。大切なのは、長所や短所でその子を判断するのではなく、長所も短所も全て引き受けて愛情を注いでやることなのではないでしょうか。これは、子供の言うことを何でも聞いてやることではありません。ダメなものはダメと善悪の判断も教えなくてはなりません。その上で私たち大人が「一緒に狐になってあげる」と言ってやれるならば・・・子供たちの心は安定し、自信をもって生きていけるのではないでしょうか。自分に自信のある子は、他人に対してもやさしく、寛容になれると思います。台東育英小学校の教育目標「思いやりのある、やさしい子、かしこい子、たくましい子」の基盤はこんなところにもあるのではないかと考えています。